

「断毒論」にみる「温疫論」の影響

西巻 明彦

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究室

日本における漢蘭折衷学派は18世紀において漢学を主体としながらも、そこに蘭学の知識を盛り込むという形が一般的であると考えられる。同時にこのことが中国伝統医学を離れて日本医学の独自化へと進んだ1つの原因と捉えることもできる。永富独嘯庵は「慢遊雜記」の中で、「和蘭の医、汗吐下を善くす。宝曆千午の春、余西游して、長崎に到り、譚師吉雄氏に就て彼の醫方を聞くことを得たり。その治術、峻劇、織巧、にわかには、邦人に用い難し。然れども汗吐下の機用に到りては、則ち、吾が古醫道と荷す。」と記し、中国伝統医学の汗吐下をオランダ医学の実態にあわせて独自の見解を述べている点は、日本医学の独自化の例としてあげることができる。また18世紀から19世紀初めの漢蘭折衷学派は永富独嘯庵の場合、白砂糖の製造、緒方春朔は火薬、また橋本伯寿はワインの製造など医学以外にも蘭学を接収していた。後年、蘭方対漢方の対立がことさらに強調されているが、18世紀から19世紀初めにかけては、それほど大きな対立になっていないと考える。

「温疫論」(1641)は明末の呉有性の著で、従来からの風・寒・暑・湿・燥・火という六淫の邪とは異なる伝染性の戻気という概念を提出した。「温疫論」巻之二雜記論に、「日月星辰は、天の有象みるべし。水火土石は、地の有形求むべし。昆虫草木は、動植物見るべし。寒熱温涼は、四時の氣、従来覚ゆべし。山嵐の瘴氣、嶺南の毒務に至りては、ことごとく地の濁氣を得て、なおもって察すべし。而して惟だ天地の雜氣、種種一ならず。亦草木に野葛巴豆有り、星辰に羅計けいわく有、昆虫に毒蛇猛兽有り、土石に雄硫磺信有るごとし。万物各善惡の等しからざる有り。是に知る雜記の毒も亦然るを。」と述べ天地の間に雜氣が存在し、多数の毒を有しているものも存在していることがわかる。さらに氣の傷する所同じからざるを論ずる中で「雜氣は、天地の氣と日うといえども、実は方土の氣に由るなり。」と記し、雜氣は方土の氣であることを主張している。

「温疫論」は日本において1770年刊行され、何回も出版され、さらに荻野元凱、畑黄山、中神琴溪、松尾淡台、百々漢陰、森立之らにより、参考書がそれぞれ出版している。「断毒論」は1807年に刊行された伝染病の隔離論で、現代からみると画期的な書であるとの論説は多い。しかし天然痘・麻疹・梅毒・疥癬を、胎毒や時疫、五運六氣にのみ起因する従来からの概念は「温疫論」が普及した18世紀後半には、それ以外の概念もすでに存在していたと考える。「断毒論、方土異氣」の中で、各地方には地方ごとの特殊な毒があることを記している。橋本伯寿はすでに「断毒論」の中で「温疫論」について読了しており、書見したことは間違いないが、「温疫論」を「僻説なり」と切り捨てていることが特徴的である。しかしすべての「温疫論」を否定しているのではなく、「国字断毒論」では「痘瘡の類は、一種の瘍にて臭氣もあり形もある故有形の毒氣といふ。此毒氣は寒暑温涼、氣運にかかわらず過不及にもかかわらず、人より人に伝染するに断る事なき惡毒の病なり……中略……方外異域におこれり。」と述べ影響を受けていると考えられ、これらについてはフルブリュッケの「海陸外科備要」や張璐玉の「医通」についても引用されており、独特な漢蘭折衷派の概念を呈している。「温疫論」は18世紀後半に普及することにより、従来からの概念とは異なる病源を主張したことは、「断毒論」においても雜氣論でその影響がみられ、蘭方のみならず新しい漢方概念とも癒合することにより、独特な思想が形成されたと考え日本医学の独自化の1つと思われる。